

草津市立矢倉小学校通信 平成31年2月1日 NO.17



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

生きていることをどのように受けとめるか

「がん教育」が小学校で広がりつつある。2人に1人が経験する身近な病気という受けとめと、だからこそ、小さい頃から正しく理解することで偏見や差別に苦しむことなく、みんなが支え合って生きていけるようにしていこうという運動が、「がん教育」を後押ししている。

先日、そのがん教育の講師として奥井さよ子さんをお招きした。がんだと知らされる前後のことを、写真を交えながら子どもたちへ語りかけてくださった。「がんなんて自分とは関係ないからと、せつかく与えられた知るチャンスを見逃して、心ない言葉で相手を傷つけたり、自分自身がそのつらい目にあったときに、しっかりと受けとめられなかったりしないように…。」「みなさんには、もっともっと幸せに生きていってほしい。明日はあたりまえにやってくるとは限りません。だから、毎日を大切にしてほしい。小さなことかも知れないけれど、大切なことをして、人の役に立ってほしい。」「『がん=死』ではありません。がん患者の中には、若い人もいるし、子どももいます。まわりに知られることで避けられたり、心ない言葉で傷つけられたりするから、がんであることをずっと誰にも知らせず命を終えた仲間が、がん患者の中にいます。自分のことがわかってもらえないことほど、つらく、悲しいことはないでしょう。私は、わかってもらえる人が身近にいてくれたから、こうして人前に出て話をして頑張れるのです。だから正しく知ってほしいのです。」自らのがん体験を語る中で訴えられた奥井さんの言葉だ。

講演の前後に、校長室でお話をさせていただいた。奥井さんは、たくさんの方に助けてもらい、支えてもらったとしみじみ語られた。初孫の誕生が、抗がん剤の治療で、うんうん苦しみ、もがいている自分を奮い立たせ、なんとしてもこれを乗り越え、初孫の顔を見たいという強い願いを生み出したこと。よりよい生き方をしていかなければ、と気づかされたのは、「いいことを教えてあげよう。がんには時間があるんだ。がんだと告知されても、だから命がすぐ奪われるということではない。時間が与えられているんだ。」という言葉。その話をしてくれたのはがん治療の権威として活躍する医師であり、友人でもある方からだったことなど。

校長室での奥井さんの話は、子どもたちへの願いと自身の生き方にも広がっていった。

今の子どもたちを見ていると、哀しいくらい、簡単に「殺す!」とか「死ね!」とか「消えろ!」などと言う。大人も言っていることがあるから、哀しさを乗り越えて怒りがわき起こってきて、とんでもないことだと訴えたくなくなるという。ほんとうに命のことがわかったら、そんなひどいことは決して言えない。そんな自分の気持ちとは反対に、じわりじわりとよくない方向に進んでいくと、心のやり場がなくなり、どうにもならなくなって、正直、「わあーっ」と叫びたくなることもあるという。子どもたちには、これから先、何かの拍子に、ふっと今日の話を思い出してもらい、自分を、そして生きていることを大切にしてほしい、そう願っているとも話してくださった。

確かに、生きることは死と常に隣り合わせのことだ。だからどうする、どのようにさせてもら

※ この通信は、これまでの号も含め、矢倉小学校ホームページでもお読みいただけます。

おうかと、自分自身への問いかけがずっと続いている。

校長 大林 道範